



# まるでわたし



葉

## まるでわたし

燃えかすがただ空に残って、高いたかいところから、やがて黒に還元される。階段ともなく、エレベーター。一気に急上昇。激しく破裂、そして死去。それがわたし、と彼女は口にする。

鼻に空気が重い。  
人ごみに酸素は足らず、口を薄ら開けて呼吸をすれば喉奥を通りかかる氷水に浸した緑茶の湯き。顎髭は硬く、たらしと曲線を描いた汗すら堰き止められ、やがて手に持つ焼きそばのプラスチックに滲んでいく。  
彼女は隣だ。皺の入らぬ目尻は垂れ下がり、無気力な歯が齧るのはメンソールの煙草一つ。ビール缶にはらはらと舞う灰は、彼女の肺の中を表すように黒ずんだ色をしている。煙草を缶に捨てるタイミングで差し出したりんご飴。赤く融ける砂糖の部分をつみ砕く歯は黄ばみ、目だけがやけにぎらぎらと命を誇張していた。黒いタンクトップから、細い肩がやけに華奢である。擦れたジーンズに覗く腰は骨に皮を貼りつけたように、張りぼて。人口密度の高い露天を掻き分け握る手首もやけに小さい。長いばかりの指が時折僕の肌を撫でる。  
小さな時計台の針が八への進退をためらっている。天気予報は外れ、雲は向こうへと押し遣られていた。  
浴衣の女たちのかき氷は、じゅくりと濡れて異様なほどに鮮やかな赤に染まり。  
突然歓喜と切なさの音が上がった。白とも橙ともつかぬ光が地面から垂直にのぼり、鈍い音を立てて弾けた。対して一番音が大きかったのは、百円シートで我が領地と言わんばかりに場所を陣取るカップルの男の方であった。人間の矮小な音声など火薬の前には霞のようなものなのだ。  
花火があがるたびに恋人たちの距離は近づき、触れ合いの面積が徐々に大きくなっていく。吐息を感じられるほどに埋められていく幼い間隔。僕と彼女の距離はむしろ広がり、先ほどまで密にあった手すら、すり抜けて逃げてしまった。彼女の横顔は約四十センチ先。肩はぶつかるギリギリに、しかし心はねじれの位置に矢印を向けていた。  
レイヤードの火薬。レイヤードの僕ら。行き着くところまで行けば、あとの祭り。壊れて、消える。  
「おなじだわ」  
彼女の形の良い顎が揺れた。目が霞んだ僕には、残像が見えた。

今頃彼女は人でひしめく電車に畳まれているのだろうか。  
雲とも花火の跡ともつかぬ濁った宵闇に忘れ去られた灰色を思う。人通りの減った道に露天はほとんど片付けられ、タオルで汗を拭う親父の顔は疲れきったもの。小さなりんご飴を握った少女が母親の元へとかけていき、街灯に形作られた影は夜に紛れた。  
まだ耳にこびりついて離れない、彼女の濡れた舌の音。

「おなじだわ」  
反芻するその声は笑っていて、濁っていた。  
燃えかすがただ空に残って、高いたかいところから、やがて黒に還元される。階段ともなく、エレベーター。一気に急上昇。激しく破裂、そして死去。それがわたし、と彼女は口にした。  
生まれたままの色の髪の毛は傷んでくしゃくしゃとなり、横顔を隠すように平べったい。いつもならば垣間見える幾筋の白髪も今は目立たぬようにひっそりと在るだけ。  
横からそうと見つめた瞳は焦点を合わせてはいなかった。瞳の茶色は透明なのに、唇の皮は裂かれたように所々赤く荒んでいる。  
休憩前に一気に光が空を埋め尽くした。轟音に負けず劣らず響く歓声。それよりもずっと通っていた声。  
「ああ、まるでわたし」  
煌めいて消えた痕から目を背けて天を仰ぐ彼女の指が撫でていたのは、痩せ細った体に似つかわしくない、僕の知らぬ大きな腹であった。

今ここにはおらぬ人を思いながら佇む小さな街灯の下。ぼやけてしまうただ一人の小さな僕の影。いつのまにか三百六十度、視界に人はおらず。僕の知るあの人はいずこ。  
枯渴した心臓を潤したくて、逃げ水を追いかけても、いつまでも届かない。